

主人公意識

2021. 9. 14

人に言われてやらされている意識だと苦痛に感じることもある。しかし、自分から進んで取り組む場合には、そうは感じない。これは、よく言われることである。やらされていることは苦痛だが、同じことでも、自分の意志でやりたいと思ってやることは、喜びにさえなる。こんな話がある。

バーベキューパーティーを催したときのことである。肉屋を営む先輩が、大量のお肉を差し入れてくれた。肉の入った箱を持ってみると、大変重たい。近くにいる後輩に持ってもらった。やはり、すごく重たいと言う。

先輩は、後輩に「そのまま1時間持っていてほしい」と言った。後輩は、「こんな重いものを1時間も持たせるのは、虐待ですよ」と言う。先輩は、「じゃあ聞くけれども、これを全部君にやると言ったらどうする」と聞いた。「こんなにもらえるのですか」と後輩は言う。

持っているものは同じであっても、考え方が変わると、重荷が喜びになる。人生も同じである。主体的に行うことが、いかに大事か。本校の教育目標には「主体的に学ぶ生徒」とある。今、求められている授業の視点は、「主体的・対話的で深い学び」である。

教育界では、いとも簡単に「主体的」という言葉を使う。だが、これほど難しく崇高なものはない。「与える教育」ではなく「求める教育」へとシフトしなければならない。教育には、与える、教えるだけではなく、気づく、引き出す要素が必要である。

そのためには、教員がお膳立てをしすぎないことである。あれもこれもとやってあげないことである。これが、なかなか難しい。待つことができなければいけない。たとえ、教員が、その道筋をつけたとしても、子どもたちが、自分の力で進んでいっている感覚や意識、いわば主人公意識が持てればいい。

これは、かなり高度な教育技術の一つである。だが、教員であれば、目指すべき理想でもある。なんだかよくわからないが、いつの間にか、力がついていく。生徒が、そう思えるように、知らず知らずのうちに、もっていくのである。

子どもたちが、自分から学びたくなるような授業ができれば、望外の喜びであろう。あるいは、子どもたちが、自分から進んで学ぼうとする、そのきっかけづくりができれば、授業をする者としては、十分ではなかろうか。

そのためには、教員自身が、主体的でなければならない。主体的な教員と接していれば、必ずやその影響を受けるはずである。教員にも、主人公意識が必要である。